気迫の一人芝居
柴田義之さんら熱演

宵の生田キャンパスで10月11日、一人芝居が上演された。文学部創立50周年記念企画で、老僧が文語体の候文で罪を悔いる「榎物語」（永井荷風作）と、多摩川にすむ大鯉との因縁を漁師が振り返る「こい」（森山正行作）。釈台の前に座り講談調で語る前者、舞台を大きく使う後者と全く作風の異なる二本立てに約80人が引き込まれた。

劇団1980（東京）の山本隆世さんと座長の柴田義之さんが熱演。柴田さんは文学部の元非常勤講師で、長年演じる「こい」は2010年の「ガラ・スター・ワンマンショー・フェスティバル」（ルーマニア）で最優秀男優賞を受賞している。

「時間も空間も超越する演劇の世界を味わってほしい」（小山内伸准教授）と企画。山本勘太さん（文2）は「芝居を見るのは初めて。プロの舞台はさすがに気迫がすごい」と感激した様子だった。

表情豊かに漁師を熱演する柴田さん

メディアの力を語る
津田大介さん×山田健太教授

新聞、テレビ、ラジオ、雑誌やソーシャルメディア……新旧さまざまなメディアで活動するジャーナリストの津田大介さんがメディアの力、ジャーナリズムの可能性について語った。聞き手は山田健太文学部教授（言論法）。

11月5日、ホームカミングデーの企画として開催され、会場の生田キャンパス特設ステージは大勢の卒業生や学生で埋まった。

津田さんは日本でツイッターを広めた一人。インターネットの政治メディア「ポリタス」を立ち上げ、選挙で各政治家の考え方の違いを分かりやすく伝え話題になった。

「新聞、テレビなどマスメディアで情報を得て、さらに人から伝わるものや、自分の体験も大切にしている。速報性とともに、独自の見方が得られるのがネット情報だが、信頼性には注意が必要」と自身のメディアとの付き合い方を披露。また、新聞の魅力として、長い歴史が反映されたデータベースの豊かさなどを挙げた。

話題は東日本大震災からの復興、貧困問題、沖縄基地問題にもおよんだ。

日本の学生の政治参加については「若者は関心を持って考えているが、自分の言葉で表現することが苦手なのではないか」と分析した。

沖縄出身の謝花隆之さん（人間科学3）は「津田さんは沖縄の問題についても現地に何度も足を運んで考えている。共感を覚えた」と話した。

文学部50周年

戦争の歴史とわたしたち
公開シンポ　藤森教授らが講演

満州事変から85年、なぜ戦争に向かったのか、戦争をどう伝えていけばいいかを考える公開シンポジウム「戦争の歴史とわたしたち―戦争を体験する、伝える、記憶する―」が10月22日、生田キャンパスで開かれた。文学部の元・現役教員3人が国家（海軍）、企業（新聞社）、個人（兵士）をテーマに講演し、約80人が聴講した。

元文学部非常勤講師で都留文科大学名誉教授の笠原十九司氏（中国近現代史）は、海軍の戦争責任について講演。

元朝日新聞論説委員で戦時報道に詳しい藤森研教授（ジャーナリズム論）は、満州事変の報道を例に朝日新聞の戦争協力について分析した。

「戦争遂行を追認した背景には、特ダネ意識や軍部・右翼からの圧力、〝国民的孤立〟への恐怖など複合的な要因があった」と説明。「多数派の声に押され、少数派が意見を言いにくくなると危い。特ダネ先行では真実追究がなおざりになる。米国のイラク戦争をみても決して過去の話ではない」と問題提起した。

軍事郵便を研究する新井勝紘元教授（日本近現代史）は、兵士が戦地から家族に宛てた封書には「驚くほど本音や詳しい戦況が記されたものがある」と指摘。「軍事郵便は膨大で全部を検閲できたわけではなかった。兵士の精神史から戦争を問える貴重な史料」と位置付けた。

質問に答える３氏。左から新井元教授、藤森教授、笠原氏

集落活性化の体験発表
経営・森本ゼミ

高齢化で担い手が不足している新潟県南魚沼市辻又の活性化に取り組む経営学部・森本祥一ゼミが、ホームカミングデーで活動発表を行った。

森本ゼミは2014年8月から辻又で調査やインタビューを開始、辻又産コシヒカリを売り込むブランド戦略を打ち出し、ライスミルクやおにぎりなど加工品を考案した。

2年間の活動記録を今夏、『大学生、限界集落へ行く』（専修大学出版局）にまとめた。

発表では森本准教授とゼミ生11人が活動経過や「辻又はスマホが通じない、コンビニもないので最初は不便を感じたが1週間いるとかえって伸びと活動できるように伸びと活動できるようになった」などのエピソードを紹介した。

当日は辻又産コシヒカリ（450㌘）30袋と、ゼミ生が作ったミョウガ（辻又産）が入った焼きギョーザ40パックを販売し、人気を呼んだ。

ギョーザの皮は米粉を使っており、試食した校友から「モチモチした皮が香ばしい」「水ギョーザにしたらもっとおいしくなるのでは」と声が上がった。

ゼミの卒業生も多数駆けつけて後輩を激励した。

現在、同ゼミでは「辻又に人を呼ぶために古民家再生や観光マップ作りも考えている」（森本准教授）と活性化の方策を探っている。

図書館で知性高める秋

法学の視点で考察　昔話「かちかち山」

あだ討ちをした『かちかち山』のウサギに、罪が問えるか――。昔話を法学の視点から考える講話会が10月17日の昼休み、神田キャンパス5号館ラーニング・コモンズアクティブラウンジAで開かれた。

講師は坂誥智美法学部准教授（日本法制史）。『かちかち山』は、おばあさんを襲ったタヌキをウサギが懲らしめる話。坂誥准教授は「時代によって内容が変わり、結末も違う」とさまざまな絵本で示しながら説明した。また、『かちかち山』はテレビの道徳番組や小学校での模擬裁判などにも使われ、「タヌキは服役した」や、「ウサギは懲役9年の判決が下された」と紹介。坂誥准教授は「あだ討ちをしたウサギが正当化されたのは江戸時代まで。法的整備がされた現代では考えられないこと。何のために法律があるのか考えてほしい」と学生に語りかけた。

絵本を見せながら説明する坂誥准教授

学生ボランティア選書展

図書館ボランティアの学生たちが薦める本の展示が、図書館本館（生田キャンパス）と神田分館で開催中だ。昨年に続き2回目。

カラフルなＰＯＰを添えて

ボランティア学生は31人。6グループに分かれて「カラフルな表紙」「四季を感じる」「人生に役立つ本」などのテーマに応じて、神田キャンパス近くの三省堂書店神保町本店で165冊を選び、ＰＯＰ（手描きの広告）を添えた。ＰＯＰ作成講習会（図書館主催）で『ＰＯＰ王の本』の著者である内田剛氏の講話を聞き、極意を学んだ。

12月21日（水）まで両図書館の6コーナーで巡回展示。展示本の貸し出しも行っている。

仏革命展　初公開資料も

図書館特別展「フランス革命を知ろう！2016―地方の革命、社会権の生成、国民経済の確立、憲法とナポレオンに注目して―」が10月21日から11月6日まで、生田キャンパス図書館本館で開催された。

本学所蔵のフランス革命関連史料群「ミシェル・ベルンシュタイン文庫」とナポレオン関係コレクションから初公開を含む約30点を展示。地方の政治状況、社会権、国民経済、憲法とナポレオンの4点に焦点を当てた。

フランス革命期終盤に登場したナポレオンに関する史料を通じて、ナポレオン全盛期から失脚、その死後までを紹介。このほかナポレオンがエジプトに侵攻した際の調査結果を細密に記録した『エジプト誌』、革命に関する事件画と人物画を収めた『フランス革命史画集成』など迫力ある大型本が目を引いていた。

同書から引用した図版と年表を組み合わせ、革命の流れと人物を分かりやすく解説。また、訪れた人が参加できる大型パズルなども飾られ、期間中多くの学生や市民らが足を運び、歴史の大転換期に思いをはせた。

第25回緑鳳学会

本学出身の研究者らで構成する専修大学緑鳳学会（小杉伸次会長）の第25回大会が10月22日、神田キャンパスで開催された。68人が参加し、最新の研究成果を報告した＝写真。

宮岡孝之法科大学院教授らが専門分野での研究を発表。パネルディスカッションでは昨年に引き続き「ミシェル・ベルンシュタイン文庫史料の学際的研究」を統一テーマに、図書館企画展の四つのテーマに沿って近江吉明文学部教授、佐々木重人学長（商学部教授）ら4人の研究者が報告を行った。